

55. 子どもが安全・安心に過ごせる地域社会へ

グループ名 立花安全パトロール隊

代表者 藤原 元信

① 活動の目的

- 子どもたちの安全・安心を確保するための登校指導、下校指導、校区内見守りパトロールを実施する。低学年の下校指導に重点を置く。
- 不審者情報が出たとき、会員総動員で校区内見守りパトロールを実施する。
- 登下校指導、校区内見守りパトロール以外の活動として
 - ・ 公民館と連携して、子どもスクール教室の中で会員の指導によって、宇宙教室（宇宙アサガオ・宇宙トマトの植栽、宇宙メダカの飼育）を開き、理科自由研究を作る。
 - ・ 立花地区のよさを調べる「ふるさと作品展」の作品を作ることを通して、子どもに夢と希望を与えるとともに、会員と子どもの相互交流を深める。

② 活動の概要

子どもの安全・安心が脅かされる悲惨な事件が全国各地で多発したことを受け、地域での見守り合いが必要と考えた。大人一人一人が常に子どもたちを見守る目をもち、子どもが違和感のある状況にいたら、すぐに声をかけることが必要とも考えた。

そこで、9年前に地域ぐるみで子どもの安全・安心を確保するために、学校と連携して「立花安全パトロール隊」を立ち上げた。過去の悲惨な事件を調べてみると、低学年の下校時に起きているので、毎週水曜日に、会員全員が参加して、子どもたちと一緒に下校することにした。毎月1週には、PTA会員にも参加してもらい、下記のような下校指導をしている。

- 下校する子どもたちと学校から子どもの家まで、共に歩いて帰る。
- 途中で引き継ぎ、それぞれの家まで共に歩いて帰る。
- 会員の家の前で出迎え、それぞれの家まで送る。

ことにして、歩きながら学校の出来事などを話し合い、交流を深めている。

このような中で、大同生命厚生事業団より助成金を受けることになった。立花安全パトロール隊の存在を再認識させるために、学校と相談して帽子を作ることにした。

- 帽子の色は、スクールカラーのエンジ色にする。
- 子どもの応募から選ばれた学校のシンボルのいちょうをモチーフにした「いちょう君」

と立花安全パトロール隊を組み合わせた立花小学校独自の帽子を作る。

このようにしたのは、子どもの事件が多発して以来、学校は「知らない人に声をかけられたら、走って逃げる。」という指導が強化され、地域住民の親切や思いやりが不審者の声かけと誤解されることも増えてきたので、このことを解消するためにも、着帽してパトロール、声かけをするようにした。作った帽子の数は100個、その配布先は



○ 会員63名には全員渡して、常に着帽してパトロールするようにした

・・・63

○ PTA会員は輪番制になっているので、つり下げ名札、腕章、帽子をセットにした

・・・20

○ 学校の指導用として

・・・17



この帽子をかぶることによって、子どもたちが安心感をもって地域の人たちと目線を合わせてあいさつができるようにした。スクールカラーの帽子をかぶっていると、子どもたちも安心するのか、会話の回数も増えていた。

登校の場合、1～6年生までが集団登校をしているので、会員たちが着帽して自宅前、四つ角に立って「あいさつ運動」を展開して、「人を避ける」指導を身に付けた子どもたちに、世の中には「子どもを見守っている人」がたくさんいることを知ってもらうことにしている。

あいさつがよくできることを立花小学校の校長先生に伝えると、校長先生は全校朝会でそのことを知らせ、あいさつの重要性を改めて子どもたちや先生たちに説明をした。その結果、地域での子どもたちのあいさつが増えてきた。

上記以外の活動として

- 危険箇所の点検
- 不審者情報が出たとき、会員総動員で校区内パトロールの実施
- 交通指導委員会、青少年補導委員会、防犯協会との連携

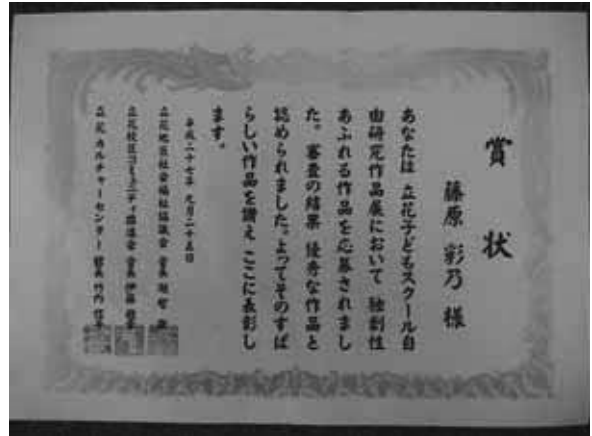
を行っているのは、地域の見守り合いが、子どもの安全・安心を確保するうえで必要と考えているからである。

夏休み中に、子どもたちが育てた宇宙アサガオの鉢で「宇宙アサガオ展」を開催した。観察したこと、調べたことをもとにして自由研究作品作りを行い、2学期の始業日に作品を提出した。

- 理科自由研究 宇宙アサガオ：3名 宇宙トマト：5名 宇宙メダカ：6名
- ふるさと学習 4名
- 宇宙アサガオ展出品者 12名



宇宙アサガオ展に出品したアサガオ、宇宙教室の作品、ふるさと学習の作品に賞状と盾を作り、9月30日に行われた学校の全校朝会で校長先生が表彰するとともに、「立花小だより」（学校だより）で氏名を掲載し、公民館だよりもこのことが載ったので、「立花安全パトロール隊」の知名度が上がるとともに、会員の意識も高まった。



このような活動を通して、会員たちは、子どもたちが自覚できるように危険性を伝え、困ったことがないか聞いてもいいこと、すぐに話してくれなくても、気に留める人がいることや伝えたいことを認識して、子どもたちに接してほしいことを常々伝え、共通理解、共通実践を図っている。

見守られながら育った子どもは、次の世代を見守る大人になり、子どもが安全・安心に過ごせるような社会につながることを確信しながら、日々のパトロール活動、子どもたちの交流活動を行っている。

③ 決算報告書

収入	大同生命厚生事業団助成金	100,000
支出	帽子 (610 × 100)	61,000
	作品に対する盾 (900 × 30)	27,000
	作品に対する賞状 (200 × 30)	6,000
	宇宙アサガオ、トマトよの鉢 (430 × 30)	12,900
	花の土 (500 × 10)	5,000
	合 計	111,900